

口語詩句投稿サイト72h

ことばの力詩集

2026年8月 第70号

口語詩句投稿サイト72h



ことばの力詩集

2026年8月 第70号

選者

暮田真名（川柳人）

3

小島なお（歌人）

10

杉本真維子（詩人）

16

高橋修宏（俳人・詩人）

25

立花 開（歌人）

32

西躰かずよし（俳人）

40

林 桂（俳人）

48

龍 秀美（詩人）

59

暮田真名 選

前川友萌香（兵庫県）

スイートピーの条件に
まばたきあります

「スイートピー」や「条件」、「まばたき」という単語を並べた、省略された書き方。「まばたきをすることが、スイートピーとして認められる条件です」と解釈した。花びらとまぶたが、「開く」という共通の動作によって重なりあう。

大西美優（広島県）

具体的杏抽象的李

漢字ばかりの見た目が楽しい。「具体的」と「抽象的」

の対比と、あんずとすももという見た目の似た二つの果物。「あんず」は一般に「あんず」と呼ばれるのに対し、「すもも」は「プラム」と別名で呼ばれることも多いのが、たしかに、抽象的だろうか。

緒方鳩 (東京都)

聴診器・バスケット・鍵・葱・

花束・すべて失くした・

神秘のあなた

名詞の羅列に迫力がある。医療機器ではなく、比較的生活感のある単語が並んでいるのを見ると、「聴診器」もおままごとのそれではないかと思う。大切な家の鍵、

もらいものの花束ですらなくす「あなた」に聖性を見
いだしてしまう心理はよくわかる。

加那屋こあ (東京都)

自傷・観照・凌霄の花の雨

「自傷」という内面に深く潜る語彙から、「観照」と
いう外にある物事を主観を交えずに観察するという言
葉、そして「凌霄」という「空をも越える」という意
味の単語へと、どんどん外側へ開かれていくところに
意外性がある。

快名 (千葉県)

奏者を待つ楽譜のように延々と
春の役所の椅子に凭れて

軽居とどめ

(東京都)

亜麻色の天使は枕がほしいです

役所の長い待ち時間を過ごしているのだろう。「奏者を待つ楽譜」を、順番待ちをする己に重ねている。しかし不思議と苛立ちは感じさせず、むしろ、これから演奏の時間が始まることを楽しみにしているようでもあるらしい。

「亜麻色の髪 of 乙女」にならない、この天使も、髪が亜麻色だと読んだ。枕もまた、髪 of 毛と関係がある。シルクやサテンでないと、髪 of 毛が摩擦で傷んでしまう。この天使が欲している枕も、きつと高級な枕だろう。天使が枕を使つて横になるイメージも良い。

坪智也（北海道）

チヨンボさえ許されていて年の暮

「チヨンボ」とは、ケアレスミスのこと。もとは麻雀用語。主に使用するのは、どちらかといえば年長者だろう。ピリピリした師走ではなく、あらかたやることを終えた職場の弛緩した空気のようなものが伝わってくる。和やかである。

市川いかる（兵庫県）

木の皿にめまいをのせて楽である

驚きがある。もしめまいが着脱式ならば、取り外しができれば楽だろう。この世界ではなぜかそのようになつており、しかも、アクセサリートレイのように木

の皿まで用意してある。皿の上に転がすめまいの軽快

な音まで聞こえてきそうだ。

中島丈多郎（京都府）

悪法のニユース 手花火手で回す

やや同語反復的な「手花火手で回す」が、現状の閉塞感を思わせる。せめて自分に動かせる範囲の物事を確かめているようでもあり、国や政治といった大きなもののぜんまいを巻き直そうとしているようでもある。

山田やまめ（千葉県）

〈ここから海まで〉と検索すれば

海までの経路に

いくつ陸橋を越え

「陸橋」とは不思議な言葉だ。「陸」を強くイメージさせながらも、「橋」なので、宙に浮いている。「陸橋」によつて、一首の重力が軽くなる。そして、海にかかる橋の下には陸がないのだという当たり前のことに、改めてはつとさせられる。

中島めんぼう(群馬県)

夏近しどわんと上がる馬の首

「どわんと」に、説得力がある。これが「いきなり」でも「とつぜん」でも、もちろん「ゆつくり」でも、馬の生命感は出なかった。オノマトペは人間の理屈を遠ざけてくれるから良いのだと思い出させてくれた。

小島なお 選

村上すう (長野県)

チョコミント

忘れられない髪形のその一部でも
洗濯をして

忘れられない記憶はほとんど形状記憶に近い。洗濯しなくてもすぐに元通りの形を取り戻して私を甘く涼やかに
つんとさせる。いつか着古して馴染むまで。

白馬
(静岡県)

涙がピントを

合わせてくれる

私を連れていく

トムソーヤ

涙でぼやけたくらいが物事を眺めるのはちょうどいいのかもしれない。日常から連れ出された先で私が目にした景色は。トムソーヤの手を待ちながら。

松浦やも
(東京都)

白樺にたこ足配線見せにいく

真っ直ぐに林立する白樺。たこ足配線を見せても幹が

絡まり出すことはないだろう。無機物の曲線と、有機物の直線の狭間で浮遊しているような私。

宮下いお（東京都）

花びらをはらって祖父の顔めくる

出棺の場面か。身体じゅう埋もれるほど敷き詰められた花を払って最後の表情を見ようとする。表情は一枚の花びらとして記憶の胸に軽やかに置かれる。

荻野ひる（埼玉県）

巫女なのに

みんな砂場と

呼んでいる

金光舞

(埼玉県)

昼間に集う子どもの声や、夜の無人の月光を吸い込む
シャーマンとしての空間。世界をB面から眺める、そ
の当然が頑なな「なのに」に裏打ちされる。

かつて虹だった身体が鏡割る

酒樽の酒が飛沫をあげるきらめきと、硝子の破片が飛
び散る反射がオーバーラップする。実体のない身体が、
実体を得るための世界を展く行為にも。

緒方鳩

(東京都)

蝙蝠のひしめく家から白い腕

それから妹の眼は濡れる

松下誠一（東京都）

蝙蝠、白い腕、妹の眼。局所的にしか見えない事物の質感や輪郭が場面よりも前面にせり出てくるような不気味さに魅了される。耽美的ブリコラージュ。

ゆき国のパラソルがあなたに瞼

雪国と似つかわしくないパラソルの語。雪よけの傘かもしれない。もしくは夏の遺物か。おおきな帆はあなたの瞼となつて、目の奥へと染みこんでくる一面の白から護る。

クイスケ（栃木県）

対話型踊り子によるユートピア

踊りながら対話もしてくれる。フィジカルとメンタル

花田港 (東京都)

との両面を請け負ってくれるアンドロイドを想像するが。「踊り子」の語が孕む痛ましさが翳る。

次の夢へハンカチ敷いて鍵を置く

夢から夢へ、それぞれの扉には鍵が要る。私の夢を次に見る誰かのために鍵を置く。「ハンカチ敷いて」に世界のほかの世界をも大切に生きる所作が見える。

杉本真維子 選

四方山駄作（岡山県）

竹の子の

子とはもう言えぬ

竹の子の

緑の鎧が、うれしい。

さみしい。

二度繰り返される「竹の子の」に竹の子への愛情が宿っている。そのことを読めば読むほど知らされることに
おいて味わい深い作品だ。

こはくいろ
(大阪府)

リボンの内側、満ちる影に

あなたを

匿いきれないまま

あたらしくなる

何かの細部だろうと想像するが、像は結ばない。おそらく結ばないように書かれている。「リボン」の三文字以外がすべて「内側」で「影」になっていてモノクロームを呈している。書かれたものが書かれたとおりになっていることへの驚きがあった。

鈴木誠
(東京都)

同じ靴から同じ靴に履き替える

甘酢

(神奈川県)

履き替えるひとは履き替えるときに別人に生まれ変わっているかもしれない。あるいは、履き替えられる靴は履き替えられるときに別の靴に生まれ変わっているかもしれない。夢のある話がここに書かれているのだと思う。

地図を広げるような気持ちで
ひと口冷たい水を飲む

水が口腔から喉を通って胃へと落ちていく。冷感の体内へのひろがり、まるで地図をひろげるかのような目覚めをからだにもたらす。評者もこのような感覚を詩に書いたことがあった。こういう感覚は他者と共有

たな
(静岡県)

できるものなのだと知ること文芸のよろこびだ。

針穴に糸をとおして

出くわした

ボビンケースに

私の悪意

「ボビンケースに／私の悪意」に目を瞠はった。
針穴を通った時点ではまだ悪意はない、とすると、
それは空間に宿るものなのか。人間の本质に迫って
いる。

古橋紗弓（愛知県）

内臓をすべて曝して

オルゴール

たったひとつの祈りを乗せて

痛々しいほどおのれを曝け出したスケルトンのオルゴール。そこに祈りがある、という視点にはっとした。思えば、オルゴールは、祈りのためだけにあるのかもしれない。それはいま現役で音楽を奏でるものも、もう音楽を奏でずに家の倉庫で眠るものも、同じなのだろう。

常田瑛子（山口県）

飛ぶ鳥が初めて知った感情の
比喩が夜明けの浜辺と思う

感情の淡さを飛ぶ鳥にあてがい、それがどんなものを飛ぶ鳥の視点をつかってこちらに見せる。比喩だけが人間に与えられた神聖な仕事なのではないか、という新しい認知に憑かれた思いだ。

伊藤いと（京都府）

銀河にもひだまりがある
手の中の缶珈琲を開く一瞬

缶珈琲を開けたときに一瞬見える真つ暗な別世界。

和泉次郎

(新潟県)

黒い波のうねりの艶めきに「銀河」「ひだまり」がかんじられた。ブラックホールは日常のこんなところ
にありそうだ。

ええあいが

なもゆうごと

ぎがねえの

どうすたものが

ええあいにぎぐ

AIと方言の組み合わせが面白い世界をつくりだしている。平仮名表記の力が存分に発揮されているともい

緒方鳩 (東京都)

える。なんでもAIに聞くことへの軽い皮肉もユーモラスで好感をもった。すべてにおいて、ちょうどよい、といったくなるような、優れたバランス感覚で書かれている。

雪が止み降ってまた止む長電話

とぎれとぎれになりながらも続いていく声のみのコミュニケーション。情報のないところが「雪」のように白く、そこをおのおのが想像で埋めながら、長電話は成り立っているのだろう。それがどういうものか、ということを書くという創作の原点に触れている。

今月は優れた作品が多かったという印象を持ちました。次回も楽しみにお待ちしております。

高橋修宏 選

ムクロジ (群馬県)

苺ミルク

メルカリで子どもが売れて

二行目の売れた「子ども」は人間か、あるいはペットだろうか。現代の人身売買やペットショップをめぐる問題さえ招きよせる。また、その報酬であろう「苺ミルク」も、「子ども」のイメージとの隣接性により換喩的に働き、あつけらかんと酷い。

田崎森太 (神奈川県)

更衣戦前となる際に棲み

秀島由里子

(広島県)

母はいつ母になったの蛇の殻

「更衣」という日常的な季語と俳句体を活かしながら、現在をめぐる世界的な危機を記す。作者は「戦前となる際」と記すが、もしや、すでに〈戦中〉ではないかという想いも打ち消せないが……。

言うまでもなく「母」は、はじめから「母」であるわけではない。また、子を産んだから直に「母」になれるわけでもない。脱皮した痕跡としての「蛇の殻」が、母なる存在の時間的、かつ多義的な根源を照らすようだ。

高遠みかみ
(大阪府)

埋葬の手つきのように春の雪

まず、「埋葬の手つきのように」と言う直喩表現に驚かされた。降っては、すぐに消えてしまう「春の雪」。それは、新たな季節の到来を感じさせるものでありながら、儚く消え去っていく死のイメージを含意しているのかもしれない。そう言えば、三島由紀夫の最期の連作のひとつも『春の雪』であつた。

石村まい
(兵庫県)

貝殻のなかの間取りをかんがえる
明け方のしあわせな幻聴

どこかマニエリスティックな幻想性を帯びた作品。何

荒武飼

(神奈川県)

より、「貝殻のなかの間取り」という把握が意表をつく。また、視覚から「しあわせな幻聴」と言う聴覚への転換も、不思議な謎をもたらしている。

生活がピアス穴から見えている

「ピアス穴」という極小から見える「生活」とは、如何なるものなのか。美は細部に宿るという格言もあるが、「生活」も細部に宿るのだろうか。生々しいリアリティが失われつつある現実の中で、「ピアス穴」から見えている光景こそ、あえかな「生活」のリアリティをとどめているのかもしれない。

高田皓輔
(千葉県)

啓蒙のような雲に濡れている

一般的に「啓蒙」と言えば、偏見や因習から抜け出させ、自由に合理的に考えさせる教え。だが、ここでは「雲」という気象の比喩に投げ込まれることで、どこか反語的な陰影を帯びている。昨今、話題となった「暗黒啓蒙」(ニック・ランド)と言う思潮の影響もあるのだろうか。

辻村陽翔
(東京都)

合歓の花閉じるさなかの叫び声

薄紅色の羽毛のような「合歓の花」。山際の林中などで出会ったとき、その不思議な形状からは、美しいだ

小川未夜子 (石川県)

けではなく、どこか妖しささえ感じさせる。この「叫び声」も、やはり合歓の花それ自身から悲鳴のように発せられたものなのかもしれない。

托卵の のちは未婚の わたしたち

「托卵」とは、別の鳥の巣に卵を産みつけ、成鳥になるまで育てさせること。カッコウなどの鳥の習性ではあるが、ここでは「わたしたち」という主体の行為だ。そして、「わたしたち」は「未婚の」ままである。昨今の育児放棄など、子育てをめぐる現在に対するアレ

臆火 (愛知県)

ゴリーであるのだろうか。

光っただけなのに

音が罪をなすりつけていた

「光」、「音」、「罪」というシンプルな単語が際立つ作品。
「光」が「音」へと転位し、それが「罪」をあぶり出す。
そのシンプルな構成ゆえに、どこか最近の無人ミサイルやドローン攻撃など、人間の姿が見えない戦闘の状況を表象するような気配も帯びている。

立花 開 選

つちや
(東京都)

夏風邪が

スタンプラリーぽく伝染る

スタンプラリーはそのために作られた場所にペタン、と押される。場所が埋まれば次へ、また次へ。その中で成立する秩序はスタンプラリーも夏風邪も確かに一緒だ。粘度の高いインクやウイルスのペタリと張り付く感覚が想像できる。

ちねんひなた（東京都）

ふたりで住みたい

ふたりふたりで住んで

かぼちゃパイとかこぼした

希望だらけの、愛情。繰り返される「ふたり」に甘やかな世界が広がる。甘いパイを食べ、食べかすが落ちる。「ふたり」が暮らす小さな部屋は、あらゆる豊かさを手にしても得られない幸せだ。

ここにおん（埼玉県）

サイレンが届かない湯の中の青菜
塩を振って、ぴたりと止んだ

れーにや (愛知県)

茹でられる青菜視点。ふつふつと揺れる水面の中は案外静かで、遠くから鳴るサイレンの音が夢の外のよう。「ぴたりと止んだ」ものが何か不明だが、無慈悲に止められたことは分かる。温度の高い世界観の中で冷感が際立つ。止んだのはサイレンか、塩を振られた青菜の命か。

言葉って

メロンに付いた

パンみたい

本当ではない部分が主役になるような、そのもの自体がまちがっているわけではないけれど拭い切れない違和

互井宇宙論

(埼玉県)

和感が残る感じ：言葉とは、常に自分を主役にしてしまふ。メロンを伝えたかったのにパンに、想いを伝えたかったのに言葉に当て嵌められてしまった。

この夜を焚べるように笑いあおう
煤色に転がるチャップリン

幸せと決めれば、どんな地獄も幸せ。生前軽やかに踊っていたのに重く煤色の物体となり転がる。人生は不平等でできており、何の罰でなくとも焼かれて転がされ、その脇で「笑いあおう」と美談にされることもある。

乾いたスポンジ

(広島県)

この町でまた米を買う

ふるさとが

あるとはどんな心地でしょうか

生まれ育った場所があっても帰れなければふるさととは呼べない。心に帰る場所がないけれど、今いるこの町で米を買う。生活の気配が「また」から滲む。その繰り返しの中で、この町がふるさとになっていくのかもしれない。

宮下いお

(東京都)

花びらをはらって祖父の顔めくる

小西電波 (北海道)

葬儀のような、静かで湿り気のある気配がする。花びらの下の祖父の顔を見たいのかと思つたが、そのまままでめくつてしまう。「顔を見たい」という当初の純粹な心は「めくりたい」という無機質な欲望に埋め尽くされた。顔の中には何があるのか。

真っ白なミシンが欲しい

雑巾を死ぬほど

縫って送りつきたい

相手を深く想いながらも、自分の知る愛し方しかない。不器用で一途な愛は可哀そうで愛おしい。そんなに大量の雑巾をもらったところで使い道なんてない

常田瑛子
(山口県)

のだが、真つ白なミシンを選ぶ時間もお金も、雑巾を縫って送る手間も、すべてあなたのため。

鳥を逃がしたあの人は金継ぎを
終えた食器のように笑った

壊れた後は、どうやっても元には戻らない。心も、事実も。逃げた鳥が生きて戻ることは稀だ。「あの人の鳥は逃げてから時間も経ち、望みが無いのだろう。涙も後悔も尽きなくても受け入れるしかないときの力の抜けた笑いは、自身の再生である。ただ、比喩に頼りすぎ読み手に任せているきらいもある。悪意の笑いかもしれない。

まちなあき
(宮城県)

かふかふとうくよ

ふよふなほれいざい

ここゆうれいのたましいおきば

「ふよふなほれいざい」から生まれる味わい深いファンタジー。ひんやりと暗い冷凍庫でひしめき合って仕舞われている姿は、確かに不思議な不気味さがある。気付くと増えすぎている保冷剤は、引き寄せられて集まる霊たちの悲しい居場所となった。

西躰かずよし 選

睦月雪花（愛知県）

日曜のバターは溶けて
トーストは淡い光の埋立地となる

いつもの食卓が心象風景へと変容する。バターが溶けるとき、トーストは無機質なひかりの射す場所へと変わる。休日の穏やかな時間。ひかりの埋立地は、自身のとおい記憶の帰る場所になる。

小笠原快（東京都）

花束、それはいばるようにひらく
つばみのまま希少種になる

飛和 (長野県)

咲かないことが希少種になることへとつながる。もしかすると語り手は、来るべき悲劇をすでに受容しているのかもしれない。「いばるのようにひらく」という一節に、生きることに対する自恃と、覚悟がするどく表現される。

香水の名前を夜に打ち明ける

名前を打ち明ける。それは恋愛と言っているのかもしれない。夜と語り手との緊密な関係。香水の名前は、かつての恋人の名前のようにも見える。そこに生まれるのは、悲しくも美しい物語に違いない。

こにおん
(埼玉県)

輪郭はもう去ったよ、と雨が云う

すでに中身が残ることは想定されていない。輪郭だけが残るということ。その輪郭さえも去るべきものとしてあるということ。中身も、輪郭もすべて洗い流される。雨のことばが、ただやさしい。

神澤保仁
(神奈川県)

橋脚が海を憶えぬように昼、
わたしを走り過ぎる子どもたち

「橋脚が海を憶えぬように」という一節に屈折を感じる。海は母性を連想させるが、それを憶えさせないために描かれる子どもたち。通常、希望あるものと

伊藤いと (京都府)

して描かれる子どもや海が、ここでは逆の役割を担っている。それは、閉じていく未来への問いなのかもしれない。

サイドミラーに

紫陽花と止まれの「れ」が
収まっている右折するまで

たとえば、「独自化に失敗した面接帰り／スプーンでパフェを崩しつづける」も同じ書き手の作品。この人は見る人なんだと思う。それは、サイドミラーに映る「止まれ」という標識の「れ」という文字だったり、パフェを崩しつづける自分自身だったりする。そうし

太田葵 (奈良県)

た時間が、一幅の絵のように映る。過ぎ去った事実が、ひとつの情景として差し出されるとき、読者は、そこにとりかえようのない時間を見るのだろう。

蛇口から垂れる雫を追いながら
手の繋ぎかたを考えていた

事故にあつた時のように、手のつなぎかたを考える時間が、ゆつくりになる。それは、登場人物の雫へのまなざしを描くことで読者へと伝えられる。長い沈黙へとつながる時間。手をつなぐことを願う相手との、どうしようもない距離がまぶしい。

小武頼子（京都府）

落葉が身を震わせる吹き溜まり

次は私の番だと思ふ

不意に気づく。いつか自分の番が来る。葉にも終わりが
あるように、自身にも確かな終わりがあると歌はやさし
く詠う。

川上真央（東京都）

さくらんぼ洗う指先からわたし

「わたし」は、どこからどこまでを指すのだろう。それが、
ちっぽけな幻想にすぎないとしても、語り手は、指先か
らが「わたし」と言う。そこには、きつぱりとした自身
の受容がある。さくらんぼにぴったりの、いさぎよさが

清々しい。

福田もや（富山県）

花柄のグラスに残る夏の雲

花柄のグラスがレトロな印象を浮き立たせる。夏の雲がグラスに映っているのだろうか。そこに残る止まった時間。

桜庭紀子（和歌山県）

漣に見えかくれする表情の

奥に触れたくなり手をひたす

確かなものを求めて触れようとする。そのときの「ひたす」という行為には、どんな理由があるのだろうか。何か

をつぐなおうとする。何かに近づこうとする。その行為は、喪失への祈りのように見える。

林 桂 選

田邊辺
(茨城県)

トマト焼けて
生きっぱなしの僕がいる

確かに私たちは、生まれてこの方、「生きっぱなし」である。この視点は面白い。「トマト焼けて」との不思議な取り合わせ。これにも、なんとなく「っぱなし」感が漂う。

飛和
(長野県)

魚だった、光だった、
と思い出す
五月の遊歩道を歩けば

植田遥大 (神奈川県)

光り溢れる五月の遊歩道を歩いていると突然甦る思い。「魚だった、光だった」。この前後の文脈を失った思いは、過去の属目なのか、幻想的に自己史を遡っているのか分からない。作者にもこの突然の思いの正体が分かっていないのだろう。ただ、この刹那が自分であるという思いに満たされているだろう。

噂話がゆつくりとまわされていて
蓮のしずかな呼吸をまねる

「蓮のしずかな呼吸」で思い起こすのは、大賀蓮（古代蓮）。2000年の眠りから覚めて開花している。その命の Spann、呼吸の長さ。「噂話がゆつくりとま

由良鴻波
(東京都)

わされていて」は、自身に関わる良からぬ噂と考えられる。ここでは消えるのをやり過ごそうという覚悟のゆつくりとした呼吸だ。

正しさに

あらゆる花は咲いていて
真水で育てられた鳳仙花

「真水で育てられた鳳仙花」にはつとさせられる。清濁を問わず、陸上の植物は「真水」で育つ。すると、ここでの「正しさに」の意味が問われてもくる。

N b o x (東京都)

パンジーに見つかって青鬼が来る

パンジーは、監視カメラ機能を持っているのかもしれない。庭先に植えられるパンジーは絶好の監視アングルをもつていそうだ。これは監視社会の比喩かもしれない。「青鬼」がパンジーの持ち主であり、情報収集者だ。どこか童話仕立ての世界であるが、それは見えない。監視社会を隠蔽するための喩なのかもしれない。このほうが怖さは増す。作品が川柳体であることを考えれば、作者の社会批判が隠されてもいるだろう。

盛武虹色 (京都府)

花の雨きみにつばさはなくていい

金井晶 (宮城県)

幼年、少年の頃に、一度は翼があればと思うことがある。山上憶良の「世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」は、現実逃避のための飛翔を断念する歌だが、この作品の「君」（年少者を想起させる）の翼願望にも、同じような思いがあるのだろう。しかし、「きみにつばさはなくていい」は、「君」への強い肯定の言葉、激励の言葉だ。「君」はいまの「君」のままでもいい。

想像のあなたの故郷の農村の
キャベツ畑に火をつけていく

「キャベツ畑に火をつけていく」行為の意味がよく分

花田港 (東京都)

からない。焼き滅ぼそうとしているのだから、否定的な行為には違いない。しかし、それには「想像のあなたの故郷」という限定がついている。現実の世界のものとして想定されていない。「あなた」との関係の複雑さは、とても読み切れない。しかし、読み切れないまま、読者の心に残る作品だ。

石を見てもらう日傘に招き入れ

この「石」はなんだろう。路傍の石ころか、庭石か、墓石か。日傘から、屋外のそれなりに大きな石であることは想像がつく。しかし、ここでの「石」は、素材の名前であって、社会的な意味が曖昧にされたままで

回る卵 (宮城県)

ある。そして、だからこそ、「石」の持つ意味を考えさせる。

ずつと

傘をさすのが下手なまま

満天星が好きです

傘をさすのが下手な人はずつと下手な気がする。傘を上手くさそうということは、生活の上での大きな課題にならないとも思える。「満天星」(どうだんつつじ)も、小さな白いベル状の花を葉隠れにつけて、可憐だが上手く咲こうとしないように見える。自分に似た存在と考えるのだろう。

甘煮
(京都府)

レモン買う

「何か」にてーこーした結果

「てーこー」が平仮名書き。自ら「何か」というように、抵抗の相手も定かではないのだろう。まして、この思いが、所謂「抵抗」であるかも定かでない。それゆえの「てーこー」の平仮名書きだろう。その微妙な感覚を捉えている。その結果として買った「レモン」も、何故なのかは了解されていないのだ。でも、案外私たちはこんな世界に生きているといえるのかもしれない。

箭田儀一
(広島県)

おはじきを舐めて清涼感とする

川上真央 (東京都)

梶井基次郎の『檸檬』を下敷きにした作品だろう。「それ（色硝子のおはじき）を嘗めてみるのが私にとってなんともいえない享楽だった。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか」を踏まえている。俳句体に焼き直したとも言えるが、もとの感覚の魅力は生かされている。

さくらんぼ洗う指先からわたし

「はつなつのひとさしゆびをもちろんか」（三橋敏雄）を思い出す。三橋はなんのために人差し指を使うのかを書いていない。ただ、身体性の全てはいま人差し指に託されている。そして、何に使うかの想像は読者に

塩本抄 (石川県)

任せている。私たちの身体に起点などないはずだ。しかし、掲句は、さくらんぼを洗っている指先から、「わたし」の存在は感得できるという。「わたし」の存在は、人差し指に託されている。私たちは、生活の場面で全身を意識することは希れだろう。常に身体の一部に神経を集中しながら、自己を認識しているのだろう。

遊び足りるいつかが怖い全員で
ブルーシートのふくらみを折る

遊び足り、遊びに満足する日がくるのだろうか。「ブルーシート」のふくらみを折る」は、花見か花火見かのために広げたシートを畳んでいる場面を想像すればよ

いのだろう。花見に飽きたためか、花火に飽きたためか。何れでもない。それ以外の時間的な要素などが終わらせるのだ。しかし、その瞬間に遊びたりてしまった思いがくるかもしれないという恐怖が走る。遊び足りたという思いは、大切な何かが終わった瞬間なのだ。

龍 秀美 選

くらたか湖春（滋賀県）

山吹のわさりと咲いて

どうしても

思い出せない声だけがある

一重の優雅な山吹の花に似つかわしくない「わさり」という擬音が不安を呼ぶ。日本では古来から身の動物に異変を感じる感性があった。

上原一樹（山梨県）

均等に盛るきんぴらの作り置き
名前をつければ感情は死ぬ

家庭のおかずの代表である「きんぴら」が均等に盛り付けられているという鉄壁の無名性。それが固有の感情を守ってくれるのだ。初行と次行の飛躍が大きいだけ衝撃も強い。

青井輪（東京都）

卵の殻きれいに剥けた
つるんとして

東京暮らしはこわくないもう

あゆな (群馬県)

つるんとした卵の顔はいつも同じでどこへ行っても通用する。おまけに目鼻が無いので個人情報も洩れず安心だ。不確定性に満ちた東京でも暮らせる。

学校へ詫びに出向いたシスターが
親子ですねといわれ
頷く

「事実」として、施設のシスターが血縁の親子であるはずはない。しかし「親子ですね」と念を押され頷くのは嘘をついたのではない。信仰と人間性に裏付けられた「真実」だからだ。

互井宇宙論（埼玉県）

志村けんは、これを保持する

「これを保持する」という憲法の文体を、庶民の圧倒的支持を得たコメディアンに使うのは一種の抵抗だろう。

Namazu（滋賀県）

カドケシ使ってるやつ
偏差値あまり高くない

カドケシは角がたくさんあつて細かいところを消すことが出来る消しゴム。大きな文意を訂正するのは創造的なことが多いが、小さな訂正は単なるまちがいが多いという発見。

たな
(静岡県)

ざりざりと鋸(のこ)を

飲み込む枇杷の幹は

その実ねだりし子の

肌の色

切られているのに、その「鋸を飲み込む」という表現は、思い出というものの避けられない強さかも知れない。

にわ
(栃木県)

ざらざらり

嫌いと苦手のさかいめを

何度も撫でるささくれの指

主体的に否定する「嫌い」と、自分に理由がありそう

な「苦手」。ささくれの指だけが、そのどちらも受け入れることができる。

植田遥大 (神奈川県)

硝子で口をぼろぼろにする想像の

氷砂糖はそれでも甘い

氷砂糖を硝子に異化することによって、痛みを経て、その甘さは更に際立つ。

大西美優 (広島県)

仏語とは不都合に似て半ズボン

何となく可笑しい。フランスでは大人が半ズボンを履

く習慣がないので「不都合」にさかのぼるのかも。

カムイカンテ（東京都）

部屋中のポニーテールが
蕎麦つぼい

実はこのポニーテールが蕎麦つぼいのではなく、蕎麦がポニーテールつぼいのだ。だから蕎麦が部屋中に蔓延している。

神澤保仁（神奈川県）

休憩のみじかさの中を散歩して
それなりに読み飛ばす記念碑

こういうことを自分もよくやっていることに気付く。
短いが休憩だ。休憩だから散歩する。記念碑があるか
ら読む。結果、読み飛ばす。「それなり」に導かれて。

ねこ
(東京都)

自我よわく、自己愛つよく
いちごのショートケーキを
頬張って泣く。

自我が弱いのに自己愛が強いと駄々っ子になり、自己
愛が強いのに自我が弱いと引きこもりになる、かも知
れないと思った。

花田港（東京都）

市役所の四方から昼徴てゆく

規定された公務員の昼休みは唯一の個々の自由な時間だろうが、それが「四方」から狭められて無力化していくというのか、それとも「昼」という時間そのものが「市役所」という存在の影響を受けて変質していくのか。

貴田雄介（熊本県）

横になり父怒られて縦になる

この語順でなければ成り立たない文字列。詩が成り立つには「父」も必然で「夫」ではだめなところが父の本質を思わせてくれる。

市川いかる（兵庫県）

音だけの世界へ逃げた嘘の耳

耳が音だけに関わっていると思う、または思いたいという衝動。その方が楽かも知れないが、それでは「嘘」になるという人間世界の難しさ。

奥井健太（滋賀県）

理科の塩・家庭科の塩・

風・滝・灯

同じ「塩」という物質が、理科という領域での見え方と家庭科では違う。「風・滝・灯」が「地水火風」という五行の世界で違って見えるように。

檜野美果子

(宮城県)

風鈴の家主を誰もみたことない

風鈴に「家主」があるのかどうか誰も知らない。知らないが、「口」だの「舌」だの、彼らを収納しているガランとした空間は確かにある。

口語詩句投稿サイト 72h

www.kougoshiku-toukou.com

ことばの力詩集

2026年8月 第70号

掲載作品 2026年6月投稿分

発行日 2026年8月1日

発行 公益財団法人佐々木泰樹育英会

東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー 40階

TEL.03-6278-5595 FAX.03-6278-5591

「ことばの力詩集」の命名は、榎本了壺氏によるものです

編集・デザイン＝アタマトテ・インターナショナル

AD＝榎本了壺 D＝坂口真理子

印刷・製本＝株式会社グラフィック

ISBN 978-4-910485-76-8

佐々木泰樹育英会の口語詩句事業

【第8回口語詩句賞】

賞の種類と賞金

大賞（原則1名）100万円 奨励賞（若干名）10万円

スケジュール

投 稿 期 間：2026年2月1日～2027年1月31日

選 考 期 間：2027年2月1日～3月5日

選考結果開示日：2027年3月18日

授 賞 式：2027年3月29日

【2027年度 口語詩句奨学金概要】

区分と給付額

中学生6万円 高校生12万円 大学生（大学院生含む）60万円

スケジュール

投 稿 期 間：2026年2月1日～2027年1月31日

選 考 期 間：2027年2月1日～3月5日

採用書類提出締切日：2027年3月12日

選考結果開示日：2027年3月19日

奨学金給付通知書授与式：2027年3月29日

※最新情報は本財団ホームページでご確認ください

<https://sasakitaijuikueikai.or.jp/>

後援

一般社団法人現代俳句協会

株式会社思潮社 現代詩手帖編集部



9784910485768



~~4926492606396~~

発行 公益財団法人 佐々木泰樹育英会